（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　白岩　祐子

本論文は、「裁判員制度」と「被害者参加制度」がともに適用される刑事裁判場面における個人の量刑判断過程を対象に、裁判に対する規範的意識および被害者の発言の影響に関する自己認知に焦点を当てつつ、理論的・実証的検討を行ったものである。論文は、これらの司法制度の特性と、従来の量刑判断過程に関する実証研究の問題点を検討した「理論編」と、実験的検討に基づきモデル構築を行った「実証編」から構成されている。

理論編では、裁判員制度と被害者参加制度をめぐり、司法実務家が「被害者の裁判参加により被告人に対して下される量刑判断は従前より重いものになる」と論じている経過を確認し、過去の実証研究が、この議論を必ずしも支持する結果を得ていないことを論じた。そのうえで、被害者の「感情的な」発言に影響されることが、裁判が理性的であるべきという規範意識により否定的に受け止められる可能性と、他者からの影響を抑制しようとする判断過程に関する社会心理学理論の適用可能性を提起し、自己抑制的な認知過程と、裁判への規範意識の影響を組み込んだ、量刑判断モデルを提案した。

続く実証編は、8 つの殺人・傷害致死事件に関する裁判シナリオ実験、あるいは模擬裁判映像を用いた実験室実験により、理論編で提示されたモデルの妥当性を検討した。まず、研究 1 と 2 により被害者の裁判参加に否定的な人ほど、被害者発言に自分が影響されることを否定し、被告人に対し軽い量刑判断を下す傾向を明らかにし、研究 3 により人々の裁判イメージを検討した。ついで、研究 4 により裁判イメージが被害者から受ける影響の認知に及ぼす効果の検討を、また研究 5 と 6 では、理性的であるべきという規範意識が強い人ほど、被害者の裁判参加に対して否定的で「理性的判断」に動機づけられることを示した。さらに、研究 7 と 8 によって、被害者の発言が重い量刑判断につながる一方で、裁判が理性的であるべきという規範意識が強いことが軽い量刑判断につながる可能性を示した。以上の結果に基づき、総合考察では、被害者参加制度のもとで裁判員が行う量刑判断のモデルを示し、社会心理学的な実証知見の応用的貢献を論ずるともに、「法律のしろうと」が持つ厳格な裁判規範意識と「市民感覚」を取り入れるという裁判員制度導入主旨との関連が、今後の実務的検討課題であることを指摘した。

本論文は、個人の判断が裁判員間の合議の中で変化し、集団決定に至る過程の解明など、知見の応用的観点から必要となる検討課題を残しているものの、裁判員裁判制度の現状に関する詳細な検討と理論的考察および実証的知見に基づき、量刑判断を規定する新たな要因を同定したうえで社会心理学的なモデルを提示したという点で、高い学術的価値を持つと評価できる。よって、審査委員会は本論文が博士（社会心理学）の学位に値するとの結論に達した。